

漁業経済学会 短 信

漁業経済学会第34回大会に出席して

農林経済研究所 中 村 史 也

今年の第34回大会は、前回北海道で開かれた33回大会の「200カイリ体制下の漁業再編」のテーマを深化発展させるという成果を挙げることが出来た。

日程上2日目に行われたシンポジウムでは、3人のパネラーによる報告を中心に、この間の成果を纏める方向で建設的な議論が行われた。惜しむらくは「以西底曳漁業と日中・日韓関係」の報告が予定されていた徳島喜太郎氏が、都合で欠席されたのが残念であった。

—南太平洋、西日本漁業を中心として—をサブテーマに、韓国・マグロ・南方トロールに焦点を据えた報告を募ったことが、一応事務局の意図を達していたようだ。

山本忠氏の「韓国漁業の展開とその問題」は、日頃関心を持ってはいるものの、実態について

は余り知られていない韓国漁業の経済メカニズム、国家政策との拘りなど、多くの教示を含んでいた。

既に300万トンを超す漁獲量を揚げ、更に増大させる韓国の勢いは、指摘の通り国民経済全体の成長度合と相即的である。それを象徴的に示すのが、'80～'85年の沖合漁業の発達であることが理解できた。

水産物消費もかなり拡大されている様だが、依存度は次第に低下するとしても、やはり日本市場は重要な位置を占め続けると共に、漁業生産面でのわが国の沿岸・沖合、或いは遠洋漁業での競合・軋轢が、今後更に大きくなるものと感じられた。

なお、韓国では沿岸・沖合を合せて近海漁業としている点、アンコウだけを獲っているわけでもないあんこう網漁業の重要性など、学ばされる所が多かった。

海外漁業交渉に実際に携わっている担当行政官としての藤波徳雄水産省国際顧問による「かつお・まぐろ漁業の問題点と将来展望」は、カツオ・マグロ漁場が公海にかなり依在しているが、南方諸国の沿岸域にも多くのウェイトが掛っている現状では、沿岸諸国との入漁交渉は重要な問題であり、PNG方式の普及による新しい段階に入った交渉現場からの実践的報告であった。

200カイリ体制以降16カ国との交渉の順

目 次

漁業経済学会第34回大会に出席して……	1
第34回大会雑感……………	2
第34回漁業経済学会大会……………	3
一般報告……………	3
総会議事(抄録)……………	4
代表理事、常任理事、監事の選出…………	6
在京理事会報告(7月9日)……………	6
編集委員会報告……………	6
新入会員の紹介……………	7

を追った「全てをオープンにした」「双方痛み分けの交渉が、長町場に耐える良い交渉」との教訓は、これからのあらゆる漁業交渉にも共通するものであろう。

説明に用いた、入漁料と漁業者の入漁意欲との最大均衡点を繋げたカーブは、概念図としては解り易かったが、より精確を期せればなお有効性を増すのではないか。

カツオ・マグロ漁業の問題は経営維持の困難さにあり、コストの低減・魚価の適正化・消費の拡大に解決の糸口を探されたが、輸入問題に対する対策も重要であると思われる。

「200カイリ時代における南方トロール漁業の対応」について報告した中井昭氏は、南方トロールが、遠洋漁業全体の再編成に関連して新たな展開を見せようとしている意味を認められた。

北洋で打撃を受けた漁業独占体の対応、新たな資本展開として南方トロールが見直され、先行投資資金に国家的資金が動員され、資本の集中集積が進んで、資本輸出・多国籍企業化が推進されるものと見通された。

以上の報告に基づいて交された総合討論では、多くの発言があり詳らかに出来ないが、200カイリ体制も10年を経過して、既に「余剰原則」は消滅し、「人類は資源をどう利用すべきか」（藤波）と云う。大局的な岐路に立たされ

ているという認識は共有され得たと思う。

また、円高・輸入増という経済環境の変化による影響がどう漁業再編を促し、対応すべきかと云う今日の問題も提起されたが、より研究を深める必要性が強調されたに留まったきらいもある。

しかしながら、2年がかりで継続して来たテーマに対する全体的成果としては、ほぼ予期された期待は満たし得たと思う。もちろんこれで終了したわけではないので、今後に向って新たな研究が積重ねられるに違いない。

一般報告について触れる余欲がなくなってしまうが、多方面に亘った10本の報告は、孰れも日常的な取組みを想像させるに足るものであった。私個人としては、若い伊藤氏・菊池氏などの意欲的研究の推進と、水口氏・加瀬氏・多屋氏などの継続的な研究の更なる深化を期待したい。

近年頃に感じることは、一年間の成果を発表する機会、その限りで重要であるに違いないが、形を整えるためのものであつてはならないし、本数され揃っていれば良いわけでもない。十分に時間をかけた、出席者相互による検討・討議による成果の共有的獲得が大切だと考えるので、今後その様な運営に配慮して戴きたい。

末尾ながら、開催校・関係者及び事務局の献身的な努力に新ためて感謝したい。

第 3 4 回 大会 雑 感

オレゴン州立大学大学院 菊 池 章 裕

5月30、31日と東京世田ヶ谷の東京農業大学で行なわれた第34回漁業経済学会に参加しての感想を書かせていただくことになった。研究報告及びシンポジウムについての詳細はこ雑文の要請ではないので、大会に初めて参加した者として気付いたことを述べることにする。

当日は少し蒸し暑い位のきれいな5月晴れで、会場の東京農大は渋谷からほど近い都心にもか

かわらず大学構内及びそれに続く住宅街にはまだ緑も残っており、環境的に恵まれた立地にあった。主催者が用意された標識に従って進んでいくほどなく会場のホールに到着できたが、裏門にも学会参加者用の道案内が立て掛けられており農大側の細やかな心配りに感謝した。

会場となった視聴覚ホールはすばらしい見晴らしが眼前に広がり、新宿副都心の高層ビル群

が見てとれる。このホールは眺望の良さもさることながら各設備が充実しており、OHP機器やオースライド等研究発表のための十分な施設が整っている。ホールの座席数も参加者数に対して多すぎる学会会場としては申し分のないスペースではなかったかと思う。何か取って注文をつけるとすれば、エレベーターがわかりにくい場所にあり、高齢の参加者が階段を使うはめになったであろうことが想像されること位である。

第一日目の一般報告は、10人の発表が行われた。正味5時間の中での発表であったから、少し時間的に余裕がなかったかという印象もあった。また、当日受け付けでもらった報告要旨に目を通す時間を持たずして発表を聴くことになり、スムーズに発表の内容をフォローしていくことが（これは私だけの問題だったのかもしれないが）困難であった。シンポジウムの内容については、学会短信としてパネラーの報告要旨が事前を送付されてきていたので理解を深めるのに役立った。郵便料金や世話人の手間等の制約もあって難しいことなのかもしれないが、なるべくならシンポジウムの方だけでなく一般報告要旨についても大会前に会員（または参加

予定者のみ）に送付できたらと思う。そうすることによって事前にそれぞれ興味のある発表の存在がはっきりするし、質問事項等もまとめておくことができる。またこうした準備によってよりつっ込んだ話を懇親会等でもすることも可能になるのではないだろうか。

2日目のシンポジウムでは3名のパネラーの発表をもとに質疑がなされたが、その中で農林水産省顧問で外国との漁業交渉を担当されてきた藤波徳雄氏の話には聞き入られた。遠洋漁業が直面する問題に対する氏のコメントは大学では得られない貴重なお話であった。今回のシンポジウムのように、アカデミックインスティテュション以外の方達にも参加してもらうことが学会の活性化にはたいへん重要だと思う。特に漁業経済学会のように実際の現場を抜きにしては考えられないような分野においては、その重要性はことさらであると思われる。これからも豊富な知識と経験をもたれた行政及び産業界からの参加をお願いしたい。

最後にグリーンホールという大学付属の宴会場で行われた懇親会が、和やかで楽しい雰囲気のもとに行なわれたこともつけ加えておかなければならない。

第34回漁業経済学会大会

学会事務局

5月30日、31日の両日、東京農業大学において、第34回大会が開催されました。

第一日目、10題の一般報告がなされ、第二日目のシンポジウムは、昨年同テーマの「200海里体制下の漁業再編—南太平洋、西日本漁業を中心として—」が日程通り実施され、多数の参加者のもと、活発な討論が行われました。

大会プログラムは次の通りです。

● 一般報告

1. 大型産地市場における競争力の再編と機能

分化

— 西日本四港の模索 —

水産大学校 廣吉 勝治

2. 北海道の水産加工業と地域的経済

— 留萌市と網走市の事例を中心に —

東京農業大学 増井 好男

3. サケと畜肉の代替関係に関する数量的分析

オレゴン州立大学大学院 菊池 章裕

4. 水産物の世代別・性別消費の特徴

東海区水産研究所 多屋 勝雄

5. 漁業技術の普及と漁場利用
ー近世大阪の打瀬網をめぐる漁場相論を通してー
京都大学大学院 伊藤 康宏
6. 裁定と指示 ー漁調委の機能と限界ー
東京水産大学 水口 憲矢
7. 小型漁船における操業態様の変化
ー小型イカ釣漁船の操業と災害ー
海上労働科学研究所 三輪 千年
8. 沿岸漁業における就業者構成の推移と展望
ー地域的差異とその根拠を中心としてー
東京水産大学 加瀬 和俊
9. 養魚産地の活性化への課題
水産大学校 島 秀典
10. 協同組合「手数料商人化」説の再検討
ー香川漁連を事例としてー
長崎大学 浜田 英嗣

シンポジウム

テーマ：200海里体制下の漁業再編
ー南太平洋、西日本漁業を中心としてー

1. 韓国漁業の展望とその問題
日本大学 山本 忠
2. かつお・まぐろ漁業と将来展望
農林水産省顧問 藤波 徳雄
3. 200海里時代における南方トロール
漁業の対応
東京水産大学 中井 昭
4. 総合討論
司会 中橋 興 廣吉 勝治

● 総会議事（抄録）

議長（米田一二三）選出，代表理事（二野瓶徳夫）の挨拶の後，開催校（東京農業大学）を代表して堀口健治先生の挨拶を頂き，議事に移った。

1. 昭和61年度事業報告及び承認
61年度の活動報告，会誌発行，短信発行等
2. 昭和61年度会計報告及び承認
61年度決算報告，同監査報告及び承認
（別掲資料1参照）
3. 昭和62年度予算案の承認（別掲資料2参照）

4. 昭和62年度事業計画案の承認

第35回大会は，昭和63年5月下旬あるいは6月初旬に東京水産大学（東京）において開催する。

シンポジウム・テーマについて（継続検討）

等，諸事業計画が承認された。

5. 学会賞選考委員会報告及び学会賞の授与

- ・学会賞：清光照夫，岩崎寿男の共著「水産経済」，「水産政策論」とともに恒星社厚生閣。

- ・学会奨励賞：多屋勝雄「飼餌料需要と底支え価格形成のメカニズム」等『漁業経済研究』に多数発表。

：増井好男「養鰻産地の立地移動

ー国際化と輸入問題を中心にー」等『漁業経済研究』に多数発表。

6. 学会賞選考委員会の選出

堀口健治，志村賢男，中井昭，浦城晋一の4氏の任期満了に伴い選考委員の選出が行われ，八木庸夫，小野征一郎，高山隆三，増田洋の4氏が新たに選考委員に選ばれました。

7. 役員改選

新役員を次の通り選出した（順不同）。

理事 秋山 博一

二野瓶徳夫

高山 隆三（慶応大学）

平沢 豊（東京水産大学）

山本 忠（日本大学）

長谷川 彰（東京水産大学）

中井 昭（東京水産大学）

大海原 宏（東京水産大学）

小野征一郎（東京水産大学）

加瀬 和俊（東京水産大学）

堀口 健治（東京農業大学）

増井 好男（東京農業大学）

多屋 勝雄（東海区水産研究所）

三輪 千年（海上労働科学研究所）

大崎 晃（国士館大学）

池田 均（北海道庁）

鈴木 旭（北海道大学）

増田 洋（北海道大学）

服部 昭（八戸大学）

別添 1 昭和61年度決算報告(1986年4月～1987年3月)

1 収入の部

(円)

科 目	予 算	決 算
会 費	1,100,000	1,053,000
力 ン パ	200,000	194,000
会 誌 売 上	20,000	121,700
大 会 関 係 収 入	120,000	94,000
寄 付 金	350,000	600,000
雑 収 入	50,000	42,271
小 計	1,840,000	2,104,971
前期繰越金	1,178,343	1,178,343
合 計	3,018,343	3,283,314

2 支出の部

(円)

科 目	予 算	決 算
会誌印刷費	1,500,000	1,344,975
通信発送費	200,000	225,750
事務局費	50,000	37,685
会 議 費	80,000	49,980
大会経費	200,000	230,478
負 担 金	43,000	41,600
雑 費	10,000	0
小 計	2,083,000	1,930,468
特別会計繰入		250,000
繰 越 金	935,343	1,102,846
合 計	3,018,343	3,283,314

3 財産目録(一般会計)

(円)

郵便貯金	21,989
振替口座	55,000
銀行預金	1,022,576
現 金	3,281
合 計	1,102,846

4 財産目録(特別会計)

(円)

郵便貯金	750,000
------	---------

別添 2 昭和62年度予算(1987年4月～1988年3月)

1 収入の部

(円)

科 目	予 算
会 費	1,100,000
力 ン パ	200,000
会 誌 売 上	80,000
大 会 関 係 収 入	100,000
寄 付 金	350,000
雑 収 入	60,000
小 計	1,890,000
前期繰越金	1,102,846
合 計	2,992,846

2 支出の部

(円)

科 目	予 算
会誌印刷費	1,300,000
通信発送費	200,000
事務局費	60,000
会 議 費	60,000
大会経費	200,000
負 担 金	43,000
雑 費	10,000
小 計	1,873,000
特別会計繰入	
繰 越 金	1,119,846
合 計	2,992,846

理事 浦城 晋一(三重大学)
内藤 一郎(三重大学)
柿本 典昭(関西大学)
倉田 亨(近畿大学)
榎 彰徳(近畿大学)
大島 襄二(関西学院大学)
志村 賢男(広島大学)
廣吉 勝治(水産大学校)
中橋 興(熊本商科大学)
八木 庸夫(長崎大学)
岩切 成郎(鹿児島大学)
片岡千賀之(鹿児島大学)

8. 日本学術会議等

日本学術会議の会員候補として長谷川彰氏が、推薦人として水産学が二野瓶徳夫氏、地域農学が中井昭氏が選ばれました。

● 代表理事、常任理事、監事の選出

総会終了後、新役員によって全国理事会を開催し、代表理事、常任理事、監事を選出しました。

代表理事 中井 昭
常任理事 小野征一郎
加瀬 和俊
堀口 健治
増井 好男
多屋 勝雄
三輪 千年
増田 洋
服部 昭
榎 彰徳
廣吉 勝治
片岡千賀之
監 事 浅田 陽治
岡 伯明

● 在京理事会報告(7月9日)

1. 次期大会(第35回大会)の準備

次期大会のシンポジウム・テーマは、中井昭、増井好男、廣吉勝治の3氏で原案を作り、次期在京理事会までに決定することとしました。

2. 常任理事の役割分担を次のように決めた。

総 務 小野征一郎
編集委員 二野瓶徳夫
高山 隆三
長谷川 彰
大海原 宏
堀口 健治
大崎 晃
多屋 勝雄
三輪 千年
会 計 加瀬 和俊
短信担当 多屋 勝雄
三輪 千年
地方常任 増田 洋
服部 昭
榎 彰徳
廣吉 勝治
片岡千賀之

3. その他

日本農学会の評議員に中井昭氏を、連絡員に小野征一郎氏が選ばれました。

● 編集委員会報告(7月21日)

7月21日に第1回編集委員会を開き、編集委員の編集代表に長谷川彰氏を決めました。今後、委員会では、投稿原稿の受理と掲載の可否について投稿者に通知することとしました。

また、編集業務のスピード化を図るために、投稿原稿を従来2部であったのを、3部とするよう投稿規程の一部を改正しました。

＜漁業経済学会誌 投稿規程＞

1. 論文の投稿者は本会会員に限る。

ただし、会員外の共同研究者を含むことは差し支えないものとする。

2. 論文は和文に限る。

3. 原稿の書き方は、執筆要領に基づくものとする。

4. 論文は、400字原稿用紙50枚程度、資料、研究ノート等は40枚程度、書評は15枚程度とする。

ただし、分載2回(約100枚程度)までを可とする。

なお、図・表類の点数を最小限にとどめること。

5. 編集委員会は、投稿原稿を審査する。

6. 初校の校正は、著者が行うこととする。

7. 抜き刷30部を著者に無料で進呈する。

なお、希望により10部単位で追加できるが、その実費は著者負担とする。

8. すべての原稿は3部（3部ともコピーでも可）提出するものとする。

昭和61年7月21日

漁業経済学会誌編集委員会

＜漁業経済学会誌 執筆要領＞

1. 論文は、200字詰または400字詰の横書き原稿用紙を使用し、横書きとする。

ただし、ワードプロセッサの原稿も可とするが、その場合は一行20字、B-5判用紙使用では26行、A-4判用紙では35行程度とする。

なお、判読可能なコピー原稿は可とする。

2. 英文の表題を必ずつけること。

3. 句読点、疑問符、カギ「」，カッコ（），中黒等の符号はすべて1マスを当てること。

ただし、文章の終りが行末に来たときは、それらの符号は行頭に置かず、行末枠外に書きこむこと。

ー（ダッシュ）や、……（点線）は、2マスをを使うこと。

ローマ字小文字や算用（アラビア）数字は、1マ스에 2字，ローマ字大文字は1マ스에 1字を当てること。

句読点は、「，。」を使用すること。

4. 脚注の必要な場合は、文章中の必要な位置に、○⁽¹⁾○⁽²⁾とカッコつき文字を入れ、脚注を最終章の後ろに、1行あけて一括記載すること。

5. 文章中に挿入の数式は、原則として一行に独立して表記すること（数式と同じ行に文章を続けられないものとする）。

分数、ルートなどが入る場合は、二行使用すること。

6. 船舶重量および水揚量を示す単位記号トン は、カタカナ書きとする。

ただし、その他の単位記号はJIS制定の記号を用い、ローマン体とする。

例：1.196万トン，kg，km，%，etc.

7. 魚種名はカタカナ書きとする。

8. 図・表は、原稿用紙内に描きこまないで、一枚ごとに別紙とすること。

図・表の番号は、全体を通して連続番号とし、図-1……図-5，表-1……表-6と表記すること。

本文記述の原稿用紙の右欄外に「図-1，または「表-2と記入し、掲載位置を指定すること。

9. 引用文献は、本文中では、引用部分を「」で囲み引用していることを明確にし、脚注の場合と同様の書き方とする。（4.を参照）。

脚注では、邦文の引用文献は著者名、『書名』（出版社名，出版年・西暦），の順にカッコ等を付けて記載する。また、英文等の引用文献も邦文と同様の順序で、現語にて記載すること。

● 新入会員の紹介〔順不同、敬称略〕

池ノ上 宏（国際水産技術開発株式会社）

三浦 順（島根県水産課）

山尾 政博（北海道大学農学部）

熊本 一規（明治学院大学）

長谷川省三（日本海区水産研究所）

学会短信 No.52

1987. 9.

事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

電話 03(471)1251